

因果関係の 複雑さと うまく付き合う

林 侑輝 (はやし ゆうき)

謙虚に割り切るといふこと

この連載では、主に経営学の観点から、現実世界の因果関係にまつわるいくつかの話題を提供してきました。第1回では、もはや日常語と化している「戦略」という言葉に注目しました。この概念は様々な要素の組み合わせからできている、しかも長い時間軸をとって論じる必要があることから、経営用語の中でも特に因果関係の説明が難しい、ということについて述べました。第2回では、企業経営を含む社会現象とは切っても切れない「因果複雑性」という性質について紹介しました。これを踏まえて、続く第3・4回では、成

功例だけの共通点を抽出することの危うさについて指摘しました。前回、すなわち5回目は、過去の現在から未来のための学びを引き出そうとする際に求められる思考法が主題でした。各回に共通していたメッセージは、「社会現象の因果関係の複雑さは人間の手に余るのだから、分析にはある種の割り切りが必要である。ただし、謙虚なやり方で」というものです。ここで言う謙虚さは、一面では、社会科学の理論や「お作法」に則ることで実現されます。前提条件の慎重な設定を行い、トライアル&エラーの繰り返しから結論を導き出し、それでいて過度な一般化を避けようとする姿勢によって、物事の科学性は担保されているからです。効率が悪いのに、奥歯に物が挟まったようなことしか言えないのが社会科学ですが、そうした積み重ねがあつてこそ、日常的な「割り切り」の拠り所にする事ができるので

術的な理論であれ、経験則や持論であれ、既に存在する知識を総動員する姿勢に繋がるのだと思えます。そうした姿勢を体現している好例が、ヤマト運輸の小倉昌氏が記した『経営学』（1999年、日経DB社）です。そこで展開されているのは、経営現象を取り巻く因果関係の複雑さを認識しつつ、それでも知恵と経験で近い将来を見通そうと努めた名経営者の戦略的思考です。同書は研究書ではないにせよ、「結局のところ、この本に戻ってくるんだよなあ」とたびたび思わされます。改めて説明するまでもないほど有名な本ですが、既に読んだことのある方も見方を変えて再読してみてはいかがでしょうか。

本連載のいくつかの回では、自身の研究内容と関係する内容についても述べてきました。社会科学の研究として書き物をし、そこから引き出せる含意について噛み砕いて伝えることの重要性を、改めて認識することができました。お付き合いいただき、誠にありがとうございました。

〈和歌山大学経済学部 講師 博士（経営学）〉

第120回 わだい浪切サロン オンライン版 (Web 会議システム ZOOM 使用)

和歌山大学・岸和田市地域連携事業

「令和時代のまちづくり戦略」

- 5年で空き店舗がゼロになった商店街 -

話題提供者 **足立 基浩氏** 和歌山大学副学長
経済学部教授

事前申込み制になっています。登録フォームにてご登録いただいた後、受講方法をメールなどでお知らせいたします。QRコード及び下記アドレスよりご登録ください。

登録アドレス: <https://forms.gle/2D4HdmwwHbUm46RL6>

Web 会議システム ZOOM による講演!
参加費無料・事前登録必要

日時 **10月21日** 水 19:00
20:30

